

具体例で内容理解を確認します

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(内山節『時間についての十二章』より)

本文

行数

群馬県多野郡上野村、大字榎原、字^{はまだいら}浜平、正確に書けばここが私の小さな山の畑のある場所である。浜平^{ちちぶさんかい}は秩父山塊^{おく}に奥深く入った、神流川^{かなな}最深部の集落である。

この小さな山の畑を耕すようになって二十年以上が経過した。村人は私に村に引越して来いと言う。私も、それも悪くないと思いながら、時々現われてはわずかばかりの畑を耕す、東京からの通い半農民の暮らしが二十年もつづいた。

この浜平^{●●}の集落に暮らすさとさんはとても記憶力のよい人なのに、私の村での滞在年数^{たいざい}だけは不思議なほどによく間違える。

「二十年ばかりではすまなかるうに」

と言うのである。

「僕^{ぼく}と強さんは、ひとつしか歳^{とし}が違わないよ」

そう言うと、さとさんはしばらく考えてから納得^{なっとく}してくれる。強さんはさとさんの家の跡取り^{あと}である。もしさとさんの言うように、私が三十年も四十年も前からこの村に来ていたとしたら、その頃^{ころ}は強さんはまだ小学生か、生まれたばかりなのである。

何度か同じような会話が^か交わされ、ようやく私にも何故さとさんがこのことだけは間違えるのかがわかってきた。

山里に暮らす人々は、①縦軸の時間と横軸の時間という二つの時間のなかを生活している。

縦軸の時間は、過去、現在、未来が縦の線で結ばれている。それは西暦とか年号であらわすことができるような過ぎゆく時間であり、けっして戻^{もど}ってくることはない*不可逆的な時間である。この縦軸の時間にしたがえば、私は二十年と少し前からこの村を訪れるようになった。

ところがこの村に滞在し、畑仕事や釣り^{つり}をしていると、確かに②もうひとつの時間世界が山里には存在していることに気づいてくる。

四月には私の山の畑も春^{むか}を迎える。冬の間凍^{こお}っていた畑の土が春の陽ざし^ひをあびて解き放たれ、畑の片隅^{かたすみ}では梅が花をつけている。それはたちまち桜の開花期を呼びさまし、山桜^{かすみ}が霞がかかったように森のなかに咲きはじめる。岩場ではヤシオツツジが静かに花を開く。

10

20

山の春は、その日を待っていたように、わきあがる。鳥の声が林のなかから届き、ふと気がつく。畑の横の畦あぜや草原では早春の草花が小さな花をさきみだれさせ、生まれたばかりの蝶ちょうや冬越ふゆこしの蜂はちたちが春の風ゆのなかに揺れている。

そして、そんなわきあがる春の日に、私の畑仕事も冬の眠りねむを終えて再開されるのである。

村人もその日を待ち望んでいる。毎年四月十日に近づかないと畑仕事ははじめられないのに、四月十五日には浜平の神様、虎王とら様の祭りが待っていて、その前日までに早春の畑仕事を終え30ないと、この山間地では春の作物はうまく育たない。春の陽ざしは、山の草木や動物たちを、そして村人たちを急にあわただしくする。

その山里の春は、私がこの村を訪れるようになった二十余年間何も変わることはなかった。面白おもしろいほどに昨年と同じ春が今年もあらわれる。毎年同じように野の花が咲きみだれ、梅や桜やツツジが咲いている。あたたかい陽ざしをあびて飛びだした虫たちの舞まいと、林からきこえてくるウグイスの声。そして村人も去年と同じように土を耕している。

考えてみれば私も二十年余りにもわたって、毎年同じことをしていた。鋤すきで土を起こし、鍬くわでさくを切る。それが終ると春イモの植え付けをすませて、ほっと一息つく。農作業は、毎年同じ季節に、昨年と同じ仕事をするのが基本なのである。

浜平のさとさんはこの家とつに嫁いでから、五十年以上も毎年同じことをしてきた。昨年な亡くなつた正治まさじさんは、八十五年の生涯しょうがいを閉じるまで同じことをしてきた。自然と結びついた山里の暮らしは、毎年回帰してくる季節とともに展開する村人の営みのなかに存在している。そしてここに縦軸の時間とは異なる、もうひとつの時間軸が生まれる。

春が訪れたとき、村人は春が戻ってきたと感じながら、それを迎え入れる。去年の春から一年が経過したと感ずるのは縦軸の時間のこと、もうひとつの時間世界では、春は円えがを描くように一度村人の前から姿を消して、いま私たちのもとに戻ってきたのである。一年の時間が過ぎ去ったのではなく、去年と同じ春が帰ってきた。時間は*えんかん円環の回転運動をしている。このような時間存在を、とりあえず私は縦軸の時間と対比させて横軸の時間と記した。

それは自然と強く結びついた暮らしと労働を営む者たちの時間世界である。春が帰ってきたから、村人も春の農作業の世界に帰る。回帰してきた時間とともに村人は一年前と同じ世界に50回帰する。

そしてわたしもいつの間にか、そんな時間存在のほうが自然に感じられるようになってきた。春が回帰してきたら私は畑仕事をはじめ。新緑が山を包みはじめたら川に下りて釣り竿を伸ばす。山にアヤメの花がみえたら、私はヤマウドやゼンマイを採りに行って、畑に豆まを播くだろう。春イモの収穫しゅうかくのときが来たら、私は秋野菜を作る準備をはじめだろう。そして紅葉の季節が終り、山や里に*風花が舞う頃、私は秋野菜の収穫を終えて冬の準備に入る。

すでに二十年以上もそうしてきた。これからもそうするだろう。まるでそれが人間の永遠の営みであるというように。

浜平のさとさんも、他の村人も、この二十年余りこの回帰する時間のなかに私を迎えてきた。四月に私が畑に姿をあらわすと、村人は「やっと畑の季節が戻ってきたね」と挨拶をする。そして虎王様のお祭りの前には早春の仕事を終えた私の畑をみて、「無事に春を迎えることができた」と一緒に喜んでくれる。そしていつの間にか回帰する浜平の春のなかに、私の畑も包みこまれていった。

だからさとさんは、私が昔からこの村に来ていたと、この問題だけは間違える。畑仕事も、釣りも、山菜採りも、この山里では縦軸の時間とともにあるのではなく、横軸の時間、すなわち永遠に回帰する時間のなかの展開なのである。

- 注 *
- * 不可逆的な……後もどりできない
 - * 円環……まるくつながっているもの
 - * 風花……初冬の風が吹いてちらちらと降る雨や雪

1 傍線①「縦軸の時間と横軸の時間」とありますが、わたしたちの生活のなかで「横軸の時間」にあてはまるものとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 朝青龍が横綱になったのは私が小学一年生のときだ。昇進の決め手となった二場所連続優勝をかけた取り組みは、まぶたに焼き付いている。
- 2 私のふるさとの徳島では、梅雨が明けると通りにおはやしの音色がひびく。大人も子供も夢中になって阿波踊りの練習に明け暮れる季節が来た。
- 3 私は生まれたときからこの町に住んでいる。その間に商店街の店は何軒か閉店し、入れ替わるように駅前に大きな駅ビルが建った。
- 4 小さな頃から何か失敗をすると、決まって夜中にいやな夢を見る。そのたびに私はあのときああすればよかった、と後悔している。

2 傍線②「もうひとつの時間世界が山里には存在している」とありますが、どのような「時間世界」が存在していますか。「…が存在している」に続くように傍線②より後の部分から二十五字以上三十字以内でぬき出し、初めと終わりの四字を書きなさい。